

《論 文》

日本における gifted という語の受容の課題

小 林 茂

札幌学院大学

要 約

本論では、日本における gifted という語の理解と社会的受容の問題の考察をおこなった。日本の教育や福祉などの支援機関では高い知能の子どもの適切な支援や支援体制がなされていないことや、生きづらさの問題も懸念されている。そのためアメリカのギフテッド教育が注目されるようになった。だが、日本において才能教育に「ギフテッド」という用語を使用することは適切かが問われる。こうしたことから、gifted や talented の語にある文化的な背景を語の使用の歴史と元にある言説と影響史を追うことで考察を行った。

キーワード：gifted, talented, ギフテッド, 社会的受容, 自己同一化

1. はじめに

本論の目的は、日本における gifted という語の理解と社会的受容の問題を考察するものである。

gifted という用語は、知的能力全般、特定の学問領域、創造的思考、リーダーシップ、ビジュアル・アーツやパフォーマンス・アーツ、の領域の1つあるいは複数で「並外れた力量を見せる、あるいはその素質のある」様々な人びとを広くとらえたカテゴリーのことである（Webb ら（2016））。アメリカ連邦政府初等中等教育局では gifted や talented の学生について「知的、創造的、芸術的、リーダーシップ能力などの分野、または特定の学問分野で高い達成能力の証拠を示し、それらの能力を完全に開花するため学校が通常提供しないサービスや活動を必要とする学生、子ども、または若者」（National Association for Gifted Children（NAGC））と定義する。

gifted の字義は、そのまま翻訳すると「才能を与えられた」という意味となるが、この言葉の肯定的に受け止められるような響きに反して、その実態は生きづらさという形で否定的な面がある。日本放送協会が放映したEテレ特集番組「素顔のギフテッド」（2020）において、ギフテッドとされる人が持つ能力について紹介されたが、彼らが持つ生きづらさの面も焦点があてられた。

Webbら(2016)の著書を翻訳した榊原(角谷・榊原(2019))は、この問題について医療面から gifted の人が誤診される問題を指摘している。榊原によれば「高知能をもつ子どもや大人、あるいはそれ以外の並外れた能力をもつ個人は、その能力が平均的な能力からあまりにもかけ離れているために、幼少時から偏見や無理解の対象となりやすいだけでなく、発達障害や様々な精神疾患と「誤診」されることが多いというショッキングな事実がある」(角谷・榊原(2019))という。また林(2017)は、gifted の子どもについて「語彙や認知能力等が周りの子どもたちよりもはるかに発達している一方で、精神面、社会面が弱い傾向にあるため、同年代の子どもに溶け込みにくい。学校の理解を得られなかったり、不登校になったりすることもしばしば見られる。精神と身体、知能と感覚の発達の非同期だけではなく、認知のアンバランスを持つ場合もあり、生きづらさを抱えていることもある」とし、定型発達の子どもの比非同期発達という面から gifted の生きづらさの問題を指摘する。さらに日本の現状において gifted とされる子どもの支援の行き先が特別支援級しかない問題も指摘される(角谷・榊原(2019))。gifted という言葉が持つ意味とは裏腹に、gifted とされる人は対社会においてリスクを抱えながら生きることになり、社会的合意を受けることができずに社会的受容という面において、十分に gifted が持つ言葉の意図が反映されない現実を生みだすものと考えられる。

林(2017)は gifted とされる人びとが負う問題に対し、支援や教育という観点から gifted という概念について正しい認識を広める必要性を強調し、日本の社会で適切な用語を使用することが重要であると指摘している。このこと自体は筆者も賛同するものである。だが、林(2017)がいうように「gifted をそのままカタカナに書き下して「ギフトテッド」という用語を使用することが、新たな概念として日本人にそのままとらえられやすい」というのは問題ではないかと考える。筆者は gifted が持つ社会的文化的背景を抜きにして日本でギフトテッドとされる人びとが gifted という語の概念と同一化はできないのではないかと考える。このことは、同時に日本の社会の gifted の社会的受容の問題ともいえる。

## 2. gifted と talented の語の教育的使用とその背景

現在、gifted と talented という語は、ともに才能のある人物を示す形容詞として用いられている。一部では知能の面で優れた場合に gifted と形容し、芸術面などで優れた場合を talented と形容すると言われているが、明確に区別する根拠はない。それぞれ互換性のあるものとして用いられている。アメリカにおけるギフトテッド教育は、1970年代から始められ、gifted への教育の必要性が法律で制定され認められた。こうした gifted と talented を持つと認められた子どもに対し、才能教育プログラム=GATE (Gifted and Talented Education) プログラムというものが設けられている。その後、1980年代に gifted 教育が一部の者への教育であるとして批判があり縮小に向かうことになる。だが、1990年代になってから National Research Center on the Gifted and

Talented が設立されるなど再び gifted 教育が見直されることに向かった。現在、アメリカでは州ごとに教育プログラムが実施されている (National Association for Gifted Children (NAGC))。また、gifted と talented の特性の医学・心理学上の位置づけが確立されていないため発達障害との関連において支援が講じられている。同年代から発達障害と才能を併せ持つ子どもに対する教育として 2E (twice-exceptional) 教育というものが始められている。2E 教育をそのまま日本語にすると「二重の特別な教育」となる。松村 (2018) は、2E を「才能・発達障害児」「二重に特別な支援を要する子ども」、2E 児への教育支援を「2E 教育」「二重の特別支援教育」と呼ぶとしている。小倉 (2009) によると、アメリカでは約 200 万人の子どもが gifted 教育の対象となっており、学習障害に次いで 2 番目の大きなグループを形成しているという。しかし、Webb らの見解からすれば gifted と talented の特徴は発達障害とは異なる固有なものであるとするので、今後、GATE (Gifted and Talented Education) プログラムと 2E 教育がどのように使い分けられ展開されていくか注意を要する。だが現状において、gifted と talented を持つ人に対して特別な配慮がなされていることは指摘できる。

こうしたアメリカの現代の状況であるが、アメリカの gifted と talented を持つ子どもへの教育は 2 世紀にわたる歴史がある。小倉 (2009) によれば、その始まりはイギリス人の学者 Galton, F. (1822-1911) の “Hereditary Genius 『遺伝的天才』” (1869) に始まるという。1901 年には、アメリカのマサチューセッツ州ウースターという都市に「天才児のための特別な学校」が開校されるということもあった。しかし現代的な意味での始まりは、Terman, L. M. (1877-1956) と Hollingworth, L. S. (1886-1939) の研究と活動から始まったといっても良い。Terman が 1916 年にスタンフォード・ビネー知能検査を開発したのち、Terman (1919) (1925, 1947, 1959) は知能検査により知的才能のある子どもの特定する研究を行い、特別な教育をほどこす必要性を強調した。Terman は Binet, A. (1857-1911) や Galton の影響を受け継ぎ、天才の遺伝的要因を重視した。Terman の功績として、天才と呼ばれる人の多くが障害や異常といった特異なものではないこと、知的能力に見合った育成環境が才能の開花に必要なことを強調したことが挙げられる。次に、Hollingworth であるが Terman に比べ、教育的環境的要因を重視した。Hollingworth (1923) の研究によれば、高い知能を持つ子どもが大人の適切な理解がなく、そのため教育と環境が得られないために苦しむことを指摘した。また、Hollingworth の貢献は、高い知能の子どもに対して歴史上初めて talent と gift という表現をしたことにある。文献初出上から追うと、Galton, F. “Hereditary Genius” (1869)→Hollingworth, L. S. “Special talents and defects: Their significance for education” (1923)→Hollingworth, L. S. “Gifted children: Their nature and nurture” (1926)→Terman, L. M. (Ed.) “The gifted group at mid-life” (1959) となる。Terman と Hollingworth の貢献と影響により、Genius から talented および gifted へと語用が変化し、talented および gifted の語は知能との関連で社会から受け止められるようになっていったと指摘できる。その後、アメリカにおいてはソビエト連邦共和国からのスプートニク・ショック (1957 年

10月4日)の影響を受け、1958年に国家防衛教育法(National Defense Education Act)が制定され、才能に恵まれた若者の育成と、それを支えるスクール・カウンセラーが小中学校に配置されるようになった(笹尾・渡辺・池田(2007))。その後の才能のある子どもへの教育は浮き沈みしながらもGATE(Gifted and Talented Education)プログラムや2E教育へと発展していくことになる。この間、talentedとgiftedの語の概念が大きく変化はしていないと指摘できる。

では、日本ではどうであろうか。松本・是永(2015)は、日本のギフテッド教育の歴史を明治期・大正期・昭和(前期・後期)期の三期に分類して考察している。第一期(明治期)の特徴は、就学率の増加から能力の個人差が目立った時期であり、低能児教育の対極として優秀児教育の問題が語られたと指摘する。優秀児教育の内容に関する議論は、国家に有用な人材の能力伸長と平均との差異から病理学の対象者となるリスクへの対処がなされたという。また優秀児の統一された定義がなかったこと、教育実践においては優秀児を対象とした特別課程の提供があったと述べている。第二期(大正期)の特徴は、明治期から大きな変化はないが、優秀児への「第二教室」が特殊学校の形態で実践され、優秀児の個性に適応した教育の提供、国家の人材育成、優良児教育法の研究がなされたという。第三期前期(1926-1945)の時期の優秀児への教育の見方は、国家の戦力を育成することであったと指摘している。第三期後期(1946-1989)では、1966年の中央審議会で初めて「才能教育」の理念が登場したことや優秀児の性格特徴の議論がなされたことが挙げられている。この時期の優秀児の性格特徴の研究は、森重敏の研究(森・上野・伊藤(1959)以降)に負うところが大きい。優秀児は、「①教師と親両方の評点が一致して多かった特性:物事を知りたがる・記憶力に富む・理解が早い・言葉が豊富で明瞭・判断推理に富む、②教師の評定で多かった特性:人気があり・尊敬される・自信がある・統率力がある、③親の評定で多かった特性:生活に張りがある・注意集中力がある」とされる(森(1971),森(1972))。また「好きなことに熱中し、逆に気が向かないことはしない、理解力がある、反応が早い、理屈っぽいが実行力がない、また不器用である、感情が激しい、少しのことに感動し、表現が大げさである、様々なことに興味をもつ、落ち着かなく注意が続かない、対人関係は年上を好み、思考する遊びを好む、同年齢と興味が合わずのけ者にされる、知能が離れすぎていることから、教えることは上手くできないことが多い」と指摘されている(森・酒井(1963),松本・是永(2015))。しかし松本・是永(2015)は、日本においては大正期の第二教室が閉じられて以降、優秀児を対象とする特殊学校が拡がらなかったことを指摘する。また角谷(2018)<sup>1</sup>は戦後に稲毛(1945)が英才という語で優生論的な観点からギフテッドについて論じていたことを指摘する。この点について知能の遺伝的要因を重視するGaltonからTermanへの系譜が見て取れる。現在では、実年齢区分で分ける教育の平等性や差別的な観点から制度的なギフテッド教育が中断したままとなっているといえる。

### 3. gifted と talented の語の使用と歴史的背景

先に Terman と Hollingworth の貢献と影響により、genius から talented および gifted へと語用が変化し、talented および gifted の語は知能との関連で社会から受け止められるようになったことを指摘した。しかし、裏を返せば Terman と Hollingworth 以前の talented および gifted という語は知能検査で測られる知能に限定されたものではなかったわけである。では、talented および gifted という語は、それぞれどのような理解のもとに受け止められてきたのか。その歴史的背景を確認する必要がある。まず言葉の用例については英語圏の最大の英語辞典である The Oxford English Dictionary (OED) から確認したい。The Oxford English Dictionary の特徴は古今東西の英語の文献に現れたすべての語彙について、語形とその変化・語源・文献初出年代・文献上の用例の列挙・厳密な語義区分とその変化に関する最も包括的な記述を行っていることにある。したがって英語圏に限っていえば gifted と talented の語がどのような意味で用いられてきたのか、The Oxford English Dictionary を参照することによりある程度確認できる。

‘talent’, ‘talented’, ‘gift’, ‘gifted’ のそれぞれの項目を調べると、talent は元々貨幣や度量衡に基づく単位であること (893 年～), 気質や性癖 (1292 年～), 心身に宿る神的な力や能力 (1430 年～), を意味するものとして用いられてきたことがわかる。talented は、その感覚 (1422 年～) や状態にあること (1827 年～) を示す。gift は、与える (1300 年～), 与えられるもの (1250 年～) という意味であり、gifted の用例となると talented と同義として贈り物が与えられた (1644 年～), 与えられた (1660 年～) 状態を示すとされる。しかし The Oxford English Dictionary で示される gift の用例として注目されるのは gift が単に何かしらの贈与を示すだけでなく、神との関係で多く用いられていることが挙げられる (例, 1597 年 Morley. Imagining that all the guiftes of God should die in themselues, if they should bee taken out of the worlde : この世から神からのギフトすべてが取り去られることは、それこそ死を想像することだ)。つまり gift を誰に与える (捧げる) のか, gift が誰から与えられたのか, という点において神が意識されて語が用いられているのである。またこの文脈で gifted と talented が同義のものとして示されている。

こうしたことから、Terman と Hollingworth が gifted と talented という語に知能との関連で新しく限定された意味合いを与えたことは、無前提ではなく単に高い知能や才能を持った個人の状態を示すにとどまらない文化的な背景を意識させるといえる。このことは gifted と talented の自己理解や社会の受け止め方という受容の問題とも結びつくものといえる。

### 4. gifted と talented の語の元になる言説と影響史

gifted と talented の語が英語圏でどのように用いられてきたか、その用例の歴史を確認した。gifted と talented の語が互換できるものであり、もとは神との関係の意味づけで言葉が使用され

てきた歴史があった。だが、なぜこの二つの語、gifted と talented の語が関係するのか。その理解のために元になる言説を確認する必要がある。

聖書のなかのマタイによる福音書 25 章 14～30 節には、イエス（前 6 頃～30 頃）の譬え話として『「タラントン」のたとえ』がある。以下は、その個所の引用である。

「天の国は、ある人が旅に出るとき、僕たちを呼んで、自分の財産を預けるようなものである。それぞれの力に応じて、一人には五タラントン、一人には二タラントン、もう一人には一タラントンを預けて、旅に出た。

早速、五タラントン受け取った者は出て行き、それで商売をして、ほかに五タラントンもうけた。同じように、二タラントン受け取った者も、ほかに二タラントンもうけた。しかし、一タラントン受け取った者は、出て行って穴を掘り、主人の金を隠した。

さて、かなり日がたってから、僕たちの主人が帰って来て、彼らと清算を始めた。

まず、五タラントン受け取った者が進み出て、ほかの五タラントンを差し出して言った。『ご主人様、五タラントンをお預けになりましたが、御覧ください。ほかに五タラントンもうけました。』

主人は言った。『よくやった。良い忠実な僕だ。お前は僅かなものに忠実だったから、多くのものを任せよう。主人の祝宴に入りなさい。』

次に、二タラントン受け取った者も進み出て言った。『ご主人様、二タラントンをお預けになりましたが、御覧ください。ほかに二タラントンもうけました。』

主人は言った。『よくやった。良い忠実な僕だ。お前は僅かなものに忠実だったから、多くのものを任せよう。主人の祝宴に入りなさい。』

一タラントン受け取った者も進み出て言った。『ご主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集める厳しい方だと知っていましたので、恐ろしくなり、出て行って、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です。』

主人は答えた。『悪い臆病な僕だ。私が蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集めることを知っていたのか。それなら、私のお金を銀行に預けておくべきだった。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きで返してもらえたのに。さあ、そのタラントンをこの男から取り上げて、十タラントン持っている者に与えよ。』

誰でも持っている人はさらに与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまで取り上げられる。この役に立たない僕を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ざしりするだろう。』

ここで語られるタラントンという貨幣・度量衡単位が、英語の talent の元になる言葉である。参考までだが、1 タラントンの通貨価値は 6,000 日分の日給に相当するそうである。

ここで語られるたとえ話は、聖書の中にある物語として宗教的な意味合いでイエスが語ったと

いうことは議論の余地はないといえる。この個所の解説として Luz, U. (1997) は、「読者諸氏・諸姉は今日の語義の意味で「タレント」、すなわち自然的な天賦の人間の才能を考えるべきか、それとも、最古の教会の解釈の意味で神の言葉と考えるべきか。後者に反対する論拠となるのは個々の奴隷が受け取る異なった額の金額であって、前者に反対する根拠となるのは、異なった人間の能力はむしろ κατά τὴν ἰδίαν δύναμιν [各々の力に応じて] で考えるべきである、ということである。おそらく、この譬えは考えを I コリ十二章（注：聖書中の「第 1 コリントの信徒への手紙」のこと）の意味での種々異なった恵みの賜物の方向に導いており、その結果、救済の賜物、預言、説教等々が考えられて良い。」と述べている。Luz, U. (1997) が指摘する第 1 コリントの信徒への手紙は、イエスの死後から約 20 年経ったのちに書かれた文書である。その 12 章では、神から人に役割に応じて与えられるさまざまな才能が賜物 (gifts) として述べられている。この文脈で、神から与えられる talent がさまざまな役割を担う人間の才能であり、神から与えられる gift として理解され、意味付けがなされてきたと指摘できる。ただし、先に Luz, U. (1997) が指摘したとおり、聖書からは神から gift として与えられる talent が宗教の文脈に限定して宗教的役割を担う能力を指すものを示すのか、人一般が持つさまざまな能力を示すものか両方の見方がとれる。

さらに、gifted と talented の語の社会的受容という面において、talented の語がどのように受け止められてきたのかについても確認する必要がある。

Luz, U. (1997) が執筆したコメンタリーのシリーズ *Evangeliisch-Katholischer Kommentar zum Neuen Testament* は、その特色として「影響史」という手法を軸として聖書中の各単元の物語が後世の人々がどのように理解・解釈してきたのかについて解説している。以下は、Luz, U. (1997) の注釈を参考にしてタラントンの理解についての影響史を示す。最古の解釈はそれを宗教的文脈に限定して関連づけたという。しかし古代教会においてすでに神の賜物に関連づけられるか、スコラ主義的術語において「無償の聖寵 *gratia gratis data*」に関連づける解釈が見られたという。キリスト教の信仰の有無関係なく、talent がすべての人間に与えられた gift という理解も否定されていなかったといえる。最初期の時代から信仰に属する恵みとしての神からの賜物と、社会的地位や富や影響力などといった人間が所有しているものの理解の両方があったといえる。中世後期になるとタラントンが単純に人間が所有するすべてのものが神から与えられたものとして、人間にあるものと人間が持つもののすべてのことであるという理解が支配的になった。16 世紀宗教改革の時代になると、カトリックもプロテスタントのどちらの立場も、恵みを受け取った者は用いなければ恵み自体を失うことになるという共通理解があったという。またこの言説の宗教改革派の理解として Calvin, J. (1509-1564) はタラントンは他者のために役立つなら神の実りと稼ぎためになるとした。このようにして gift として受けた talent を活用することが奨励された。イギリスにおいては『「譬えは共同体に対する忠実の義務と積極的な仕事を説教する。…なぜなら、共同体を助けるものは、助ける者をより立派でより豊かなものにする』』ものとして受け止められたと指摘している。こうして宗教改革期の 16 世紀以降、タラントンと称されるものは、個

人に与えられた恵みというだけではなく、社会のなかで活かし社会のなかに還元されるものとして理解が広がっていったといえる。また、恵み、すなわち神から与えられた gift には普遍的恩恵（生まれながらにすべての人に与えている恵み）と特殊恩恵（信仰との関連で与えられる恵み）の両面の理解があり、欧米圏の脱宗教化した世界でもそれぞれ同じ文脈で理解が進んだものと考えられる。つまり、特に神との関係を意識することがなくても、個人に与えられた gift や talent は活かすことが推奨され、共同体に還元されるものとして社会に受容されていったといえる。

## 5. 日本における gifted の語の社会的受容と承認の問題

昭和の時代以降、日本においては優れた才能を持つ子どもへの公的な教育システムがないまま現在に至っている。林（2017）が指摘するところによれば、近年、松村（2003）や小泉（2014）（2016）といった研究者・臨床家の取り組みや、ポーター（2001）のインターネットによる発信により一般にもギフテッド教育の用語が広まってきている現状がある。こうした流れを受け、杉山・小倉・岡（2009）の著書や Webb ら（2016）の翻訳、NHK の特集でギフテッドが紹介されるようになったといえる。少しずつであるが、日本の社会にギフテッドの用語と存在が浸透してきているといえる。こうした取り組みにより、ギフテッドとされる子どもや成人が社会から認知され受容されるならば良い方向にあるといえる。

だが、これまで考察してきたように、gifted と talented の語が英語圏やキリスト教文化圏でどのように形成され、受け止められてきたのか、その背景抜きに考えることはできない。つまり、アメリカからギフテッドという言葉や支援上の概念を輸入してくるだけではギフテッドとされる子どもや成人の支援は定着しないと考える。言葉だけではなく、同時に社会に才能を持つ者や才能教育を尊ぶ文化を形成する必要がある。ギフテッドという言葉が問いかけるものは、ある人が持って生まれたものを個人の特性に限定されるものではなく、社会が育て、尊ぼうとするかといった日本文化の課題を示しているといえる。

また、日本において高知能の子どもや成人に対しギフテッドと称するのは、ある種のカテゴリズと個人の特性化にともなうラベリングに留まらないか危惧する。さらに、日本においてギフテッドと呼ばれる当事者が社会との関係において自分をどのように理解するのかの問題もある。gifted と talented の語の文化的背景にある神が前提されない社会で「誰からの」gift として自分の才能を意識するのか、またそれを「どこに」還元するのだろうか。日本のような宗教文化的な背景の異なる社会においても、ギフテッドが個人の特性だけの話ではなく、社会が文化的に gifted や talented を尊ぶ土壌が形成できているかの問題がある。言い換えればギフテッドという語を使うことで、自らの持つ才能と日本社会との間で自己同一化できるかの課題である。社会からの承認や受容がないなかで、個人の特性に還元化された才能は生きづらさという形で個人に託されるリスクとなる。社会のなかで受容されず、生きづらさを抱えながらギフテッドと呼ばれて、



その贈り物がありがた迷惑と受け止められないか危惧する。

日本においても才能教育が認められることは望ましいことであるが、適切な位置づけのもとで社会的受容がなされ、社会との関係で当人の生きづらさという問題が解消することを筆者は願っている。そこで、改めてギフテッドという含みが強い用語は適切なのだろうか。ギフテッドという言葉の輸入元であるアメリカにおいても gifted という用語がエリート主義や差別という観点からの批判も指摘されている(角谷(2018)<sup>1)</sup>)。こうしたことを考慮すると、筆者は、ギフテッドという用語よりもタレンテッド(ただし、日本においては芸能人をタレントと称しているのでタレンテッド教育というと、芸能人の育成と混同されるかもしれない)、もしくは単に才能という用語を用いる方が日本においては適当ではないかと考える。また日本においてギフテッドとされるものの概念についても Wechsler や Binet の知能検査から導き出すことで十分なのだろうか。知能自体のとらえ方の問題がある。こうした概念の不明確さの問題は、優秀児という用語ではあるが森の研究に対しても指摘されてきたことである(野呂(1972))。また gifted と talented で示される才能は、知能面だけで評価できないのではないか。ギフテッドについても、才能が認められる領域を限定して明確化する必要がある。こうした問題を整理したうえで、日本の文脈のなかで適切な用語が考案され、定着することが望まれる。

## 6. まとめ

本論では日本において社会的文化的背景を抜きにしてギフテッドという用語が適切かという問題意識のもとに考察を進めた。最初に現在のアメリカの教育分野において gifted や talented の用語が結びついた始まりを追い、さらに欧米圏で gift や talent の語が受容された歴史的背景を確認した。そこでは社会文化的背景として、個人に与えられた gift や talent は活かすことが推奨され、共同体に還元されるものとして社会に受容されたことが明らかにした。こうした背景を抜きにして、ギフテッドという用語だけを採用して日本の才能教育が可能となり、社会に定着できるのか問題を示し、より適切な用語が用いられる必要性を示した。

## 謝辞

このテーマについて貴重な考察の機会を与えてくださった室橋春光先生の御助言を心から感謝いたします。

## 文 献

稲毛金七(1945). 英才教育論. 教育学研究, 13号, pp1-11.

小倉正義(2009). アメリカにおけるギフテッド教育. in ギフテッド 天才の育て方, 学研教育みらい.

- 小泉雅彦 (2014). 読み書きに困難を持つ知的ギフテッドの支援. 子ども発達臨床研究, 第6巻, pp131-136.
- 小泉雅彦 (2016). 認知機能にアンバランスを抱える子どもの『生きづらさ』と教育— WISC-IVで高い一般知的能力指標を示す知的ギフテッド群—. 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 第124号. Pp145-151.
- 杉山登志郎・小倉正義・岡南 (2009). ギフテッド 天才の育て方. 学研教育みらい.
- 笹尾敏明・渡辺直登・池田満 (2007). コミュニティ心理学の誕生から現在まで. コミュニティ心理学ハンドブック. 東京大学出版会.
- 角谷詩織 (2018)<sup>1</sup>. ギフティッド児の誤診を防ぐ: その理解と、適した環境の必要性 (1). チャイルド・リサーチ・ネット (CRN). <https://www.blog.crn.or.jp/report/02/249.html>
- 角谷詩織 (2018)<sup>2</sup>. ギフティッド児の誤診を防ぐ: その理解と、適した環境の必要性 (2). チャイルド・リサーチ・ネット (CRN). <https://www.blog.crn.or.jp/report/02/251.html>
- 角谷詩織 (2018)<sup>3</sup>. ギフティッド児の誤診を防ぐ: その理解と、適した環境の必要性 (3). チャイルド・リサーチ・ネット (CRN). <https://www.blog.crn.or.jp/report/02/253.html>
- 林陸 (2017). ギフテッドの概念と日本における教育の可能性. 滋賀大学教育学部紀要, 第67巻, pp199-204.
- ポーター倫子 (2011). アメリカのギフテッド教育事情. チャイルド・リサーチ・ネット (CRN). <https://www.blog.crn.or.jp/report/02/130.html>
- 松本茉莉衣・是永かな子 (2015). 日本におけるギフテッド教育の歴史的展開—先行研究検討から—, 高知大学学術研究報告, 第64巻, pp51-59.
- 松村暢隆 (2003). アメリカの才能教育—多様な学習ニーズに応える特別支援. 東信堂.
- 松村暢隆 (2018). 発達多様性に応じるアメリカの2E教育: ギフテッド (才能児) の発達障害と超活動性. 関西大学文学論集, 第68巻3号, pp1-30.
- 森重敏・上原万里子・伊藤礼子 (1959). 知能優秀児の特性に関する基礎研究 (研究発表) (日本保育学会第十二回大会特集号), 幼児の教育, 第58巻9号, pp5-7.
- 森重敏・酒井清 (1963). 優秀児: その心理と教育. 誠信書房.
- 森重敏 (1971). 優秀児の心理. 日本文化科学社.
- 森重敏 (1972). わが国における優秀児の心理学的研究. 風間書房.
- 須田拓 (2018). 神の恵みの自由. 新キリスト教組織神学事典. 教文館.
- 聖書 聖書協会共同訳 旧約聖書続編付き, マタイによる福音書. (2018). 日本聖書協会.
- 野呂正 (1972). 書評「森重敏著, わが国における優秀児の心理学的研究」, 教育心理学研究. 第20巻, 3号.
- Hollingworth, L. S. (1923). Special talents and defects: Their significance for education. Macmillan.
- Hollingworth, L. S. (1926). Gifted children: Their nature and nurture. Macmillan.
- Gifted and Talented Students: Glossary of Terms. National Association for Gifted Children (NAGC) HP. <https://www.nagc.org/resources-publications/resources/glossary-terms>. (2020年11月11日参照)
- Gifted By State: National Association for Gifted Children (NAGC) HP. <http://www.nagc.org/information-publications/gifted-state>. (2020年12月26日参照)
- Terman, L. M. (1919). The Intelligence of School Children; How Children Differ in Ability, the Use of Mental Tests in School Grading, and the Proper Education of Exceptional Children. Houghton Mifflin Company.
- Terman, L. M. (1925, 1947, 1959). Genetic Studies of Genius. Stanford University Press.
- Terman, L. M. (Ed.). (1959). The gifted group at mid-life. Stanford University Press.
- The Oxford English Dictionary (OED)<sup>2</sup> (1989). 'gift', 'gifted', 'talent', 'talented'. Oxford University Press.
- Luz, U. (1997). Evangelisch-Katholischer Kommntar zum Neuen Testament I/3 Das Evangelium nach Matthäus (Mt18-25). Benziger Verlag und Neukirchener Verlag. (小河陽訳 (2004). EKK 新約聖書注解マタイによる福音書 I / 3. 教文館.)
- Webb, J. T., Amend, E. R., Beljan, P., Webb, N. E., Kuzujanakis, M., Olenchak, F. R., & Goerss, J. (2016). Misdiagnosis and Dual Diagnoses of Gifted Children and Adults: ADHD, Bipolar, OCD, Asperger's, Depression, and Other Disorders (2nd Edition). Great Potential Press (角谷詩織・榊原洋一監訳 (2019). ギフティッド その誤診と重複診断: 心理・医療・教育の現場から. 北大路書房.)
- 素顔のギフテッド (2020). 日本放送協会. 2020年3月12日放送.

## The problem of acceptance of the word gifted in Japan

Shigeru KOBAYASHI

### Summary

In this paper, I considered the problem of understanding the word gifted and social acceptance in Japan.

There are concerns about the lack of appropriate support and support systems for highly intelligent children at organizations in the areas of education and welfare in Japan, and the difficulty in living due to the problem. As a result, the gifted education in the United States has come to the attention in Japan. However, the question is whether it is appropriate to use the term 'gifted' for the education of children with high intelligence in Japan. For this reason, this paper considered the cultural background of word gifted and talented by tracing the history and the underlying discourse and influence.

Keywords: gifted, talented, social acceptance, self-identification

(こばやし しげる 札幌学院大学心理学部 臨床心理学科)

